

盲人短歌の世界

光なき世界の光

邦夫著

短歌新聞社

著者略歴



谷 邦夫（本名・国夫）
明治37年5月12日 栃木県に生まれる。
大正9年 宇都宮市立商業学校卒業。
衣料百貨類を商うKK佐原屋商店社長。
湯津上村商工会長。県商工会連合会理事。

元湯津上村議会議長（村議当選5回）

元栃木県芸術祭運営協議会副会長。

元栃木県芸術祭文芸部会長。

大正9年「創作」社友となり若山牧水にその没するまで9年間師事した。

大正14年「檣」に入り昭和2年同人となつて牧水没後は専ら吉植庄亮に師事した。現在「檣」社友選歌担当同人。

昭和37年「当道」創刊、現在主宰している。

栃木県歌人クラブ委員長。

日本歌人クラブ地方委員。

著書に「盲生の歌」・歌集「青き起伏」・「現代日本盲人歌集」・「続現代日本盲人歌集」・歌集「彩裳」などがある。

現住所 栃木県那須郡湯津上村佐良土 〒324-04

盲人短歌の世界 光なき世界の光 <当道叢書>

昭和48年8月1日 印刷

昭和48年8月5日 発行

著者 谷 邦夫

〒324-04 栃木県那須郡湯津上村佐良土

発行者 石黒清介

印刷所 協同印刷KK

発行所 短歌新聞社

東京都杉並区高円寺南4-43-9
振替口座 東京 21683番
電話 03 (312) 9185番

定価 1200円

目次

第一部 盲人短歌の世界 九

- (1) 盲人短歌の定義
 - (2) 短歌精神の法悦
 - (3) 盲人短歌の芽生えと伸展
 - (4) 盲人制度「当道座」について
 - (5) 盲人短歌と点字
 - (6) 近代短歌と癩盲歌
 - (7) 「新万葉集」に選ばれた癩盲歌
 - (8) 北原白秋等著名歌人の失明
 - (9) 戦盲の歌
 - (10) 一般盲人短歌の種々相
 - (11) 失明歌人の歌風の静と動
 - (12) 盲人短歌の特殊用語
 - (13) 盲人短歌の特殊性
 - (14) 盲人秀歌
 - (15) 光なき世界の光
 - (16) 結び
 - (17) 抽出盲人秀歌(この
- △光なき世界の光▽の絶唱を見よ)

第二部 北原 白秋 — 「黒檜」「牡丹の木」の薄明吟 六

宮脇 武夫 — 失明者の沈潜した写真詠 八

第三部

癩盲歌人諸家

- 明石 海人 — 「白描」の煌く詩情……………七
島田 尺草 — 詩情恻々と迫る癩盲の歌……………一〇九
柳原 白蓮 — 華麗なる歌人晩年の失明……………一二九
中井克比古 — 失明觀照の東洋的幽玄……………一三九
秩父 明水 — 哀しき癩盲者晩婚の愛……………一四九
下山 清 — 私生児・弱視・つんぼ・貧困の放浪歌人……………一五九
桜戸 丈司 — 癩盲の世界に知る人間の摂理……………一六九
石川福之助 — 失明した境涯の深い自己凝視……………一七九
西田忠次郎 — 入院手術の断続にめげぬ詩心……………一八九
鈴木 和子 — 死刑囚島秋人と心霊婚姻の愛歌……………二〇九

―八三ツの門Vの苦患詠―

村上多一郎・松崎水星・朝滋夫・隅青鳥・田村史郎・沢田五郎・萩原澄・市里

武雄・金夏日・依田照彦

「新万葉集」の癩盲歌……………二三

―選ばれた陰惨な真实性―

戦盲の歌……………三五

―失明に屈せぬ忠誠心―

盲人工員の歌……………三五

―特殊工場で働く失明者達―

盲生の歌……………三三

―苦悩の底から湧く精神の輝き―

一般失明歌人……………三三

―苛酷な運命にひるまぬ短歌精神―

谷歌秋・小森美恵子・中沢豊三郎・東繁造・田崎鶴松・畑原正司・田中長三・
黒田空彦 他

第四部 日本盲歌人伝

―「世界盲人百科辞典」執筆抜萃―

蟬丸・明石検校覚一・吉川湊一・山田検校斗養一・小野古道・植山検校江眠軒
梅之・小関検校千歳一・塙保己一・本居春庭・高橋残夢・蘆野屋検校麻績一・
北原白秋・明石海人・島田尺草・秩父明水・宮脇武夫・柳原白蓮

後記

三九

三九

光なき世界の光

第
一
部

盲人短歌の世界

(1) 盲人短歌の定義

盲人短歌の世界を述べる前に、まず盲人の定義に関する見解を考えてみたい。

盲の概念と定義については現在もなお定説がない。医学的盲とは両眼とも光覚のないもの、すなわち、視力零をいう（一九三二〇昭和七年度日本眼科医師会）と定義されているようであるが、尚ある程度の残存視力をどのように認めるかは、日本においては教育上、福祉対策上の統一はない。また、各国のその定義がまちまちである。

盲を学問的に厳密にいえば、光覚さえも全く喪失した全盲のことであるが、そのほかに視覚障害のため生計を営み得ないほどのものを経済盲、以前に従事していた仕事に復帰できないものを職業盲、あるいは点字教育を必要とするようなものを教育盲など、社会政策上、教育上いろいろな盲の呼び方もある。

このようにいくつもの呼び方があるのは、混乱を招くので、一つに統一することが望まれる

が、関係各機関では総合的な検討が進められているようである。

ところで、全盲におけるような狭い意味の定義は、実際に適用しにくいので、ある程度の保有（残存）視力を認めるのが実状である。

イギリスの盲人法では、盲人とは△視力を必要とする仕事をなし得ないほどに視力の障害ある者▽と定義し、視力においては60分の3以下となっている。我国の文部省の判別基準（昭28）では△盲者とは普通の児童用教科書による教育が不適當で、おおむね点字教育を必要と認められる者とし、視力については眼鏡を使用してもその矯正視力が両眼で0・02に達しない者、準盲とは眼鏡を使用しても、その矯正視力が両眼で0・02以上、0・04に達しない者▽としている。これらの見解より、ひらたくいえば、盲人とは全盲と強度の弱視を含めて、定義されているようである。従ってここに挙げる盲人短歌とは、全盲と強度の弱視の人の詠む短歌のことである。

(2) 短歌精神の法悦

盲人短歌をここに詳述するに当って、劈頭に書いておきたいことは△短歌精神の法悦▽ということである。

短歌の道にいそしんでいる盲人や身体障害者達の歌を作るといふことは、趣味や娯楽の域を越えて、何かもっと切実な、根源的に「生」にかかわるものへの、精神的な努力としてなされているようである。殊に中途失明者の場合はこの傾向は著しいと思われる。

この世にたった一度の人生において、暗黒の世界に堕ちた悲運な中途失明者が懊悩の末に歌を作ることを知り―或は已に作歌していた者は、作歌に一層の執着を覚えて、―歌を心の糧として、思いをまぎらわせ、なくさめられ、次第に歌を作る事に生甲斐を感じ、歌を作ることに祈りのごとき心の輝きを覚えるという、過程を辿るのであるが―この短歌というひとつの詩に拠る心の光が、運命にひるまぬ生活力を生み、苛酷な宿命を切り拓いてゆく意志を生むならば、それは宗教的とも云い得る短歌精神の法悦である。

イギリスの詩人アーノルドは人詩は決して宗教ではないが、宗教の代用物としては最も主要なものだ。Vといって居るが、たしかに詩はある場合、宗教が精神の世界に果す役割もしていると思う。それは詩の中の純粹な美は、ある時は神であり、ある時は真理でもあるからである。

私のいう短歌精神の法悦は、この詩の要素を根源としてしているのである。

世にも不幸な癩失明者の明石海人は、その歌集「白描」の序文に人短歌を学び、あらためて己れを見、人を見、山川草木を見るに及んで、己が棲む大地の如何に美しく、またきびしいかを身

をもつて感じ、積年の苦渋をその一首一首に放射して、時には流涕し、時には抃舞べんぶしながら、肉身に生きる己れを祝福した。人の世を脱れて人の世を知り、骨肉と離れて愛を信じ、明を失って内にひらく青山白雲をも見た。癩はまた天啓でもあった。Vと書いているが、世の失明者歌人達も、その生命感的な抒情の、ぎりぎりの感動を打ちつけた真情を詠む時に、暗黒の世界のうちにひらく青山白雲をも見ることが出来よう。人の生れているということは、一面には云い難い苦しい事であり、寂しい事である。ことに失明者の暗黒の世界の苦しさ寂しさは、私達の想像に絶するものに違いない。しかしその苦しさ寂しさの感動を、短歌にうたいあげる時に、ひとつの芸術を創造する歓喜を感じるのであるが、それはまた更に新たなる希望を生み、自己に対する向上心を起して来るに相違ないのである。即ち、身心の苦悩にあえぎながら、詠む一首一首ごとに、一切を棄てて一切を得た悦びの世界を招き、救われている姿なのである。

そしてこのことが、見えぬ眼に青山白雲を見ることであり、晩年の失明者北原白秋が「平生の和敬ひとえに我と我が好める道に終始するのみVと薄明の世界に歌集「黒桧」と「牡丹の木」の詩情を沈著させて、悟道に近い諦観を得たという、短歌精神の法悦である。

(3) 盲人短歌の芽生えと伸展

盲歌人の出現の歴史は古く、平安時代前期の蟬丸せみまるを初めとする。

蟬丸は十世紀の盲歌人で、またわが国の琵琶法師の祖でもある。その出身および経歴については生没も不明で古くから異説疑義が多い。

今昔物語巻二十四によると

——其の時に逢坂の関に一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞ云ひける。これは敦実あつみと申しける式部卿の宮の雑色にてなむありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年来琵琶としらを弾き給ひけるを常に聞きて、蟬丸、琵琶をなむ微妙に弾く。

とあり、宇多天皇の皇子敦実親王の雑色であるという。

平家物語巻十には

——四宮しのみや河原になりぬれば、ここは、昔延喜第四の皇子蟬丸の、関の嵐に心を澄まし、琵琶をひき給ひしに、博雅はくがの三位といし人風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間歩みを運び、立ち聞きて、かの三曲を伝へけん、藁屋わらやの床とこの古へも、思ひやられてあはれなり。——

とあって、醍醐天皇の第四皇子ともいっている。後世、今昔物語説を肯定するものが多いようである。

ある。盲目の琵琶の名手で、和歌をよくし、京都東方の関所逢坂山に草庵を結び住んだと伝えられている。

蟬丸の和歌で勅撰集にはいつているのは、「後撰集」に一首、「新古今集」に二首、「続古今」に一首の四首である。

1 これやこの行も帰るも別れてはしるもしらぬも相坂の関 後撰集 雑

2 秋風になびくあさぢの末ごとに置く白露のあはれ世の中 新古今 雑下

3 世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ 同 同

4 逢坂の関の嵐の烈しきにしひてぞぬたる世を過ぎむとて 続古今 雑中

このうち、1の後撰集の歌は小倉百人一首にも採られているが、収録された本によっては第三句が「別れつつ」となって居るものもあり、百人一首の原型も「つつ」と思われる。3の新古今の歌の第三句は、今昔物語には「すごしてむ」とあり、また4の続古今の歌の第五句は、今昔物語には「世をすごすとて」として載っている。いずれも伝承歌であるが、「新古今」の場合など、各撰者がこぞって伝承された蟬丸の歌二首を選びあげているのは興味深い。

とにかく蟬丸は盲目の歌人であり、逢坂の関の関神をまつる巫祝的存在で「蟬歌の名人」といった考え方が、その面影を伝えていよう。